

知性的活動原理における、〈神の imago の在り処〉の究明

——ドイツ神秘思想成立へ向けての「理論的布石」
としてのマイスター・ディートリッヒ——

長 町 裕 司

「決定的なことは、認識的真理、倫理的善、生物的-審美的な種の適合性や有能性などではなく、人間が一つの像から形成されているということである。人間はその全体的形態において一つの像であり、しかもそのことは正しく、本質的で、明白である」(Romano Guardini, *Grundlegung der Bildungslehre. Versuch einer Bestimmung des Pädagogisch-Eigentlichen*, 1959, S. 23).

ラテン中世の13世紀末から14世紀初頭に開花をみる、ドイツのドミニコ会を通してのキリスト教神秘主義の新たな展開は、その定礎とその後の長い射程での濃厚な影響活動史(Wirkungsgeschichte)の基点をマイスター・エックハルト(ca. 1260-1328)の著作活動と説教・講話活動に負っていることは疑い得ない。けれども、エックハルトの精神活動の固有性を際立たせるにしても、その独創的な思索と霊性の活路がただその個人史からの形成と覚醒からのみ開顕した、とは言えないであろう。このような認識関心に即する限りでは、エックハルトの諸著作に脈打つ諸思想要因に組織的な理論上の枠組みを通して直接的かつ決定的な影響を与えたフライベルクのディートリッヒ(ca. 1240-1318/20)⁰⁾の思考連関からの照明は、いわゆるドイツ神秘思想の成立にとっての全体的布置(Gesamtkonstellation)を開明する上で、不可欠で最優先されるべき研究課題の一つである。この論稿では、ディートリッヒの思考内実の中心的主題を成す「自らの本質によって活動する」¹⁾知性としての能動知性に対する理解の展開に定位して、その思考連関からの照明を探求していくことにする。

Ⅰ 序：ディートリッヒの、至福論を準拠枠とする知性理解の核心

先導的な問いとしては、以下のような問題連関が際立ってくる：ディートリッヒの

独創的な知性論を成り立たしめた刷新的な構図は、如何なる思考土壌もしくは思考要因の主導性の下に展開可能になったのであろうか？——この問いに端的に答えるための準備考察として、批判版全集が刊行されるに及んでのここ 30 数年来のディートリッヒ解釈史に学ぶところから、先行的に一定の思考脈絡を描き出すことができよう。先ず第一に、神学的動機がディートリッヒの革命的な哲学的知性論の構想を先導していると見る解釈視点は重要であり、改めて吟味する必要がある²⁾。13 世紀末（おそらく 1290 年後の数年内）に起草され、比較的初期の著作に属する『至福直観について (*De visione beatifica*)』は、「神へ向かう合一 (unio ad Deum)」を主題の枠組みともしており、神学的に裏づけられた人間の尊厳の可能根拠を哲学的知性理解の透徹から開明する構想と言える。その結末の部分は、く至福直観の様態について (*De modo visionis beatae*) という表題の下に締め括られるが、「かの至福なる直観は、われわれにおいて能動知性に即して、如何にして無媒介的に神へのわれわれの合一によって完全化されるところのものか³⁾という問いかけを以て始まる。人間の最終的規定としての究極的救済への関心に基づく「至福の可能性とその様態」の考察は、既に 12 世紀・13 世紀の組織的神学が存分に展開したコンテキストに他ならない。然るにディートリッヒは、この中世スコラ学の神学的枠組みを肯定的に活用しつつも、「神への合一」の場所論的究明を、知性それ自身である本質的な活動原理において、またこの知性的活動原理自体の内在的な遂行として貫徹するのである。即ちここでは、形而上学によってのみ切り開かれる思惟領域が同時に、時間的-運動的な自然事物へと外的に方向づけられていない知性の自立的〈自己〉成立から展開されるところのものとなる⁴⁾。この点でディートリッヒの究明の独自性は、その始原よりの発出 (processio) からして第一の根源なる神と直接に能動的な同形相性 (conformitas) に立つ知性 (人間の内なる、本質によって知性であるところの「能動知性」) の成立の在り方を明らかにする問題構制に収斂する。それ故、『至福直観について』の考察全体の基礎は、く神への秩序づけにおける能動知性 (intellectus agens in ordine ad Deum) という表題下に置かれる。他方、われわれがそれであるところの存在者は、(この地上での自然的種としての活動においては) 能動知性と形相的に一致しているわけではない⁵⁾。それ故、「神の像 (imago)」としてのキリスト教の人間理解がディートリッヒの能動知性論の構築においてどのように展開され得ているのかを明らかにする必要がある。我々は、以下でこの主要なポイントを、「神の imago」についてのディートリ

ッヒの独創的解釈を示すテキストの分析を基礎に論じることにした (II 本論)。しかしながら更に、ディートリッヒが能動知性に固有な厳密に存在論的な身分 (status) をアリストテレス的能力論の一般の構図から脱却して⁶⁾追究する意図に関して、その哲学的な根本要因が解明されねばならない。ディートリッヒの下では、可能態からの現実態化がなされるプロセスが依拠する限りでのモデルが「本質による知性」には妥当しない、とされるのである。ディートリッヒの知性論は、アリストテレスのカテゴリー秩序の外部に展開される⁷⁾のみではなく、むしろカテゴリーによって規定され得る自然的存在者の領域に先立って、自然的存在性の現出から存在論的に独立した根源領野を主題化するものと言えよう。〈神との合一の場所論〉を可能ならしめるこの根源領野は、「その恒久性 (sempiternitas) において原初的-自発的に活動的な〈本質による知性〉の認識遂行」において成り立っている。このように存在論的にも差異化される場所論の問題構制については、稿を改めて更に包括的に論究する必要がある。

II 本論：神の imago の在り処の究明

「神の imago の在り処」に関するディートリッヒの中心テーゼは、差し当たり次のように定式化される：神の imago は、本性的にはその原型に対して実体的同形相性・相等性 (conformitas substantialis) を有する能動知性のみに見出されるのであって、可能知性を含めて所謂すべての靈魂の諸能力には付帶的 (accidentalis) 対応における完全化を必要とする類似 (similitudo) が存するのみである。この定式化されたテーゼが表明する限りでの „imago-similitudo“ の区別は、中世の聖書解釈と創造論を通して繰り返し問題とされた「創世記」1章 26-27節を典拠としている。但しその解釈は、当該の聖書箇所文脈が含意する内容を全く超え出ている。

„Imago“ は、本性のレヴェルでの (第一の根源たる) 神との本質的結合を意味し、「他における自ら自身であるかのごとく、imago 化されたところのものはその imago を表出する」⁸⁾。何故ならば、この表出 (expressio) において imago とは、imago 化されるものの本性もしくは本質の固有性に即して〈成る〉ところのもの⁹⁾、その本質に即して代理となるもの (repraesentativum) だからである¹⁰⁾。即ち imago が構成されるのは、その起源であるところの原型 (: imago 化されるところのもの) への本質連関における同形相性 (conformitas) ・共実体性 (consubstantialitas) において

であり¹¹⁾、この事態はまた、「本性もしくは本質の数による同一性」としての(如何なる外化する関係も含まない)形相的流出及び知性的に固有な流出(emanatio formalis sive intellectualis)としてのみ理解されることになる¹²⁾。以上と相違して similitudo とは、可能知性を初めとする諸能力の活動化及び習性(habitus)・徳の形成に付帶的レヴェルで見出せるのであって、このレヴェルでは——トマスとも協調して——人間精神の恩寵(gratia)による高揚と栄光化について語ることに意義があると言える¹³⁾。Imago が実体的内在(intrinsecum substantiale)に即しての神への無媒介的で近接した合一化と理解されるのに対し、similitudo を通しての接近(approximatio)は何らかの外来的な付加された形相規定に即してなのである¹⁴⁾。

『至福直観について』1.2と『知性と知性認識されるものについて』II 32-38のテキストは、(A) imago としての能動知性に固有化される発出(processio)・流出(emanatio)について、及び(B) imago としての能動知性の本質遂行(知性認識)の内実と射程に関して、詳細な論述を提供している。先ず(A)の観点に関して決定的なのは、その他すべてのものの創造が作用因に即して(=原因は、動きかけたものの外部に留まって結果を生む virtus effectiva)であるのに対して、本質によって知性であるところの能動知性の発出は、「かの最高の最も形相的な本質から自らの本質が形相的に流れ出ることに即して」である¹⁵⁾、という主張である。神的根源からのこのような形相的—知性的流出(emanatio formalis et intellectualis)は、より高次で高貴なる様式として区別されるだけでなく¹⁶⁾、〈自己活動的発出〉と理解されなければならない¹⁷⁾。即ち imago である限りでの発出は、その発出の根源(principium)を認識する遂行によるところの自己活動態であり、「……このような知性認識遂行がその本質の発出と受容そのものなのである」¹⁸⁾。従って、能動知性は自らの活動において発出する。即ち、能動知性はその発出において自らの在り方を自発的活動態として受け取るため、そこから発出が為される根源に対して受動的に規定されているのではない。「能動知性がその本質を受容する」という語り方は、「その本質をより高次の諸々の根源から……活動として受容する」¹⁹⁾といった文脈でのみ妥当する。上述したような能動知性に固有化される発出は、『諸原因についての書(Liber de causis)』に見られるように、原因の秩序(ordō causalis)の特質からも解明される²⁰⁾。知性における原因の秩序の特質は、自然的存在者の根拠づけ関係の図式を当てはめることから理解できない²¹⁾。自然的存在秩序に見出せる原因づけられたもの(causatum)と

原因づけるところの根源 (principium causandi) は、前者の后者への全き依存関係において捉えられても、相互に表象化されることによる差異化が生じる限り、この差異は「imago 化される根源の imago における内在」という能動知性の存立には妥当せず、imago の完全な理拠 (completa ratio) を満たさないのである²²⁾。

上述の論拠は更に、ディートリッヒが作用因性と目的因性を自然的存在者の存立を考察する自然 (哲) 学的考察法にのみ属する因果性として限定し、形而上学から除外する事態を帰結する²³⁾。能動知性の活動態は、根源そのものが本質の最内奥に内在する (immanens) 在り方なので²⁴⁾、この内在的本質に対しては作用因や目的因は単に外的なものとして現れるのである²⁵⁾。この思考連関は更に、ディートリッヒの形而上学のコンセプトがトマスとの相異において、形而上学の理念のアリストテレス的端緒から乖離する地点を明らかにすることになる。本稿では主題的に論じる余地のないこの問題構制²⁶⁾は、〈形而上学の存在-神学的 (onto-theologisch) 体制〉を争点として、(ディートリッヒとエックハルトとに共通する) 〈神-存在論的 (theo-ontologisch) な形而上学構想〉及び新プラトン主義の潮流における〈精神形而上学の刷新的自己規定〉へと連繋することになろう。

(B) の観点からここでは、「能動知性が自らの本質を受容するのは、その根源を知性認識している自己活動態においてである」という前述の根本主張から開陳される問題領域に論述を留め置く。「(完全な理拠を満たす imago に他ならない) 本質を受け取る」とは、「本質の知性認識 (= 知性の本質成立を通しての、その本質自体の〈自己〉遂行)」を意味し、認識する活動と本質が同一である自己活動的な本質の遂行によるこの認識は、原初的・起源的に (imago 化される場所の) 根源の認識に基づいている²⁷⁾。ディートリッヒは、知性的-形相的流出 (emanatio formalis) として固有化される能動知性の活動態を (卓越した意味での) 「或る (懐胎する) 概念 quidam conceptus」として²⁸⁾、その「懐胎する活動態」によって——受容的に、しかし同時に自発的に——根源を知性認識しており、その根源認識において自らの本質の認識 (自己認識) を基礎づける、と解き明かす。そこで能動知性は、第一にそして主要にその根源へと本質連関することにおいて²⁹⁾、第一義的に「神に適した (神を受け入れる praecipue capax Dei)」ところのものである³⁰⁾。この本質連関がそれ自体、恒久の自己活動態に他ならないが故に、根源からの知性の発出 (processio) と根源へ

の向き直り・還帰 (conversio; reditio) の単一な知性認識の内での同時性³¹⁾が能動知性の本質的な自己認識を成しているのである。能動知性の発出に固有な *imago* としての在り方は、同時に発出の根源への回帰性としての自己活動態なのである。従って、能動知性の自己活動態としての本質実体が懐胎する (concipere) 内実——知性認識の対象領域——は、(i) 能動知性はその本質を受容しつつ自己成立するところの根源それ自身 (ii) その根源との流出的・還帰的本質連関の下での活動態としての自らの本質、ということになる³²⁾。然るに、その知性認識遂行において既に自らであるところのものの外部には何もかも認識しない能動知性の自己認識³³⁾は、(iii) その単一性において、すべての規定的内容の一なる理拠 *ratio* でもある³⁴⁾根源から展開される存在者全体の宇宙を包含するのである³⁵⁾。元より上記 (i) (ii) (iii) の認識遂行は三様のものではなく、知性認識の活動である以外の何もものでもない「完全な自己還帰による自らの本質への回帰 (*rediens super essentiam suam reditione completa*)」なのである³⁶⁾。(上記の註 (35) の箇所)「自らの包摂をもって存在するものの宇宙を包含する (*comprehendere suo ambitu totam universitatem entium*)」と述べられる事態は、「存在するものの宇宙の可認識性」の根拠を指し示している。即ち、自己活動態としての本質遂行による知性は、存在するものすべて (*omnia entia*) が単一なる知的懐胎において「存在するものとして知性的に輝き出る」³⁷⁾ところの「存在するもの全体の宇宙の範型 (*exemplar*)」なのである³⁸⁾。

結 語

上述のごとく、神の *imago* の在り処を巡るディートリッヒの思索は、人間の魂における実体的内在 (*intrinsecum substantiale*) として〈神との合一〉を遂行する知性的活動本質の理解のために理論的論拠を与えている。その際、「根源である神からの形相的・知性的発出 (*processio ut emanatio formalis sive intellectualis*) と根源への向き直り・還帰 (conversio; reditio) の単一な知性的活動本質 (= 能動知性認識の内での同時性) についての精神形而上学的自己理解は、エックハルトにおける「原像 (*imago Dei*) への回帰を通しての、存在の被造的規定からの脱去 (*negatio negationis*)」³⁹⁾という霊的躍動の思想的基盤を準備する思考要因と考えられる。本論稿は、このような影響活動史的思考連関の解明のための第一歩の域を出ないが、今後更に幾重もの層から成る問題構制を追究してゆくことにしたい。

注

0) Dietrich von Freiberg (ラテン名: ウリベルクのテウトン人テオドリクス) は、1272-74 ラテン・アヴェロエス主義の嵐が逆巻くパリで修学、Trier で講師として教えた後は、1291-93 Paris でベトルス・ロンバルドゥス『命題集』講師、1293-1297 ドイツ・ドミニコ会のテウトニア管区長 (94-96 総長代理兼任) の要職に在り、1296-97 (アルベルトゥス・マグヌスについて、ドイツ人としては二人目の) パリ大学神学教授 (Magister actu regens) を務めた。ディートリッヒの思想情況と精神環境については、Kurt Flasch, *Dietrich von Freiberg. Philosophie, Theologie, Naturforschung um 1300*, Frankfurt a. M. 2007, S. 19-105 に詳細な叙述が見られる。

ディートリッヒの著作の内、*Tractatus Magistri Theodorici De visione beatifica* [= 引用略号: *De vis. beat.*] 及び *Tractatus De intellectu et intelligibili Magistri Theodorici* [= 引用略号: *De int.*] を主として用い、後続数字 (例えば 1.1.1 (2) や II 37 (2)) は、Dietrich von Freiberg, *Opera omnia*. Tomus 1: Schriften zur Intellekttheorie mit einer Einleitung von Kurt Flasch, hrg. von Burkhard Mojsisch, Hamburg 1977 に従う。その他の著作の引用に際しては、全タイトルをもってなされる。

- 1) Cf. *De vis. beat.* 3. 2. 9. 4. (7): „Iste igitur est modus actionis, qua aliquid agit per suam essentiam et quantum ad rationem principii et quantum ad rationem termini seu effectus ipsius actionis.“
- 2) Cf. K.-H. Kandler, *Theologische Implikationen der Philosophie Dietrichs von Freiberg*, in: K.-H. Kandler, B. Mojsisch und F.-B. Stammkötter (Hrsg.), *Dietrich von Freiberg. Neue Perspektiven seiner Philosophie, Theologie und Naturwissenschaft*, Amsterdam/Philadelphia 1999, S. 121-134, besonders S. 129 f. 尚、この解釈に関連して、クラウス・リーゼンフーパー「フライベルクのディートリッヒの知性論」(上智大学 中世思想研究所 編 『中世と近世のあいだ—— 14 世紀におけるスコラ学と神秘思想——』知泉書館 2007 年, 55-124 頁), 64 頁以下も参照。
- 3) *De vis. beat.* 4. 1. (1): „qualiter illa beata visio perficiatur in nobis per unionem nostri ad Deum immediate secundum intellectum agentem.“
- 4) Cf. Kurt Flasch, a. a. O., S. 131 ff. (besonders S. 134 f.); S. 349 ff.
- 5) *De vis. beat.* 1. 4. (3): „Id autem, quod operatur homo etiam circa Deum quantum ad exteriorem cogitativam, id est secundum intellectum possibilem factum in actu, intelligendo et amando, non agit hoc nec operatur per suam essentiam, sed per extrinsecam et extraneam a se operationem et per speciem, quae est extrinseca ab essentia sua.“ Cf. *Ibid.* 2. 1 (5) (6).
- 6) Cf. *De vis. beat.* 1. 1. 7 (3): „Secundo et alia ratione patet non convenire accidenti cuicumque dictus modus excedendi proprium subiectum, qui competit intellectui, qui est intellectus per essentiam.“

- 7) *De vis. beat.* 4. 3. 4 (6) : „Ex hoc autem convenit omni intellectui, ut sit extra genus praedicamenti et non sit in aliquo genere praedicamenti, ...“
- 8) *De vis. beat.* 1. 2. 1. 1. 6. (2) : „Imaginatium autem expressivum est suae imaginis quasi sui ipsius in altero.“
- 9) *Ibid.* : „Igitur oportet in tali expressione attendere hoc, quod fiat secundum proprietatem naturae seu essentiae imaginati.“
- 10) *Ibid.* (6) : „... quod ad completam et propriissimam rationem imaginis in rebus creatis pertinet, ut imago eius, cuius est imago, sit repraesentativum secundum naturam seu essentiam suam, id est imaginati et eorum, quae sunt essentiae per se. ...“
- 11) *De vis. beat.* 1. 1. 1. 1. (3) : „Magis igitur imago proprie dicitur secundum quandam sub-tantialem conformitatem supposita origine unius ab alio ut quaedam consubstantialitas imaginis ad imaginatum, et hoc vel secundum naturae seu essentiae identitatem numeralem, ...“ Cf. *De vis. beat.* 1. 1. 1. 1 (3); 1. 2. 1. 1. 5 (2). Hans - Georg Gadamer は, repraesentatio としての imago (Bild) の存立は, その根源の自己表現 (Selbstdarstellung) としての「存在における増加 (ein Zuwachs an Sein) であることを解明し, 芸術における画像や彫像の存在価も存在論的生起として, 単なる模像 (Abbild) から厳密に区別されることを呈示している: ders., *Wahrheit und Methode. Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, Tübingen 1960, jetzt: ders., *Gesammelte Werke I*, Tübingen 1990, S. 139-149.
- 12) *De vis. beat.* 1. 2. 1. 1. 7. (2) : „... secundum quandam formalem defluxum essentiae suae (16 rb) ab illa summa et formalissima essentia, quae Deus est, intellectualiter procedens ab ea et eo capiens suam essentiam, quod intelligit illam summam essentiam.“
- 13) *De vis. beat.* 1. 1. 1. (2) : „Huiusmodi autem habitus virtutum sanctificationis et iustificationis concernunt necessario actus et habitus intellectuales, quibus per exterius cogitativum seu per intellectum possibilem negotiamur, in quo consistit similitudo ad Deum, quae est per gratiam.“
- Ibid.* (5) : „Et si quis dicat, quod secundum ea, quae pertinent ad intellectum possibilem, invenitur distinctio originis, [...], dicendum ad hoc, quod in huiusmodi originatione seu emanatione attenditur solum quaedam similitudo originis divinarum personarum, non autem imago, ...“
- 14) Cf. *De int.* II 32 (3) : „Ista enim approximatio attenditur secundum intrinsecum substantiale rei, et ideo proprie dicitur imago. Omnis autem alia approximatio, quae est secundum aliquid extrinsecum rei, in quo potius attenditur quaedam similitudo quam imago proprie.“

実体 *substantia*, 原因性 *causalitas* 及び個別者 *individuum* といった規定性が、〈本質による〉知性である能動知性に固有に相応しいとされるのは、自然事物に定位した後天的概念の拡張もしくは単にレベルを上昇化する転用によるのではない。これ等の普遍的諸規定の現実態性は、逆転した様式で (*modo converso*) 知性自体の本質において見出されるのである (*De int.* II 14 (2))。例えば「実体」という規定は、能動知性には固有に (*proprie*) 当てはまるが、可能知性にはただ適合するものとして (*appropriate*) 帰属せしめられ得る、とされる (cf. *De int.* III 8; *De vis. beat.* 3. 2. 9. 2 (5))。知性の個別者性については、更に *De int.* II 13-18; III 9 を参照。

15) *De vis. beat.* 1. 2. 1. 1. 7 (2) : „In productione enim aliarum rerum dixit Deus et factae sunt, et sic secundum effectivam virtutem omnipotentiae suae deductae sunt in esse. Talis autem intellectus, de quo sermo est, non modo sic, sicut aliae res, processit in esse, sed secundum quendam formalem defluxum essentiae suae ...“

16) *Ibid.* : „Quod quidem tali intellectui convenit secundum rationem suae essentiae et ex modo suae emanationis a suo principio. Emanat enim talis intellectus a suo principio, Deo, altiore quodam et nobiliore modo quam res aliae productae a Deo.“

17) *De vis. beat.* 1. 2. 1. 1. 7. (3) : „... scilicet quod talis intellectus nihil intelligit extra se. Principium enim substantiae suae, a quo intellectualiter fluit, magis intimum est quam ipse talis intellectus sibi ipsi, et sic intelligendo suum principium non intelligit aliquid extra se, immo plus intra se quam in eo, quod intelligit suam essentiam.“

Ibid. (4) : „Et sic huiusmodi intellectus per essentiam semper in actu procedit a Deo quodam formali defluxu intellectus ex intellectu in quantum huiusmodi, id est ut tam intellectus procedens sua intellectione, qua intelligit suum principium, ...“

18) *De int.* II 34 (3) : „Procedere autem in quantum imago est procedere cognoscendo eum, a quo procedit, ita, quod ipsa talis cognitio sit ipsa processio et acceptio suae essentiae, ...“ Cf. *De vis. beat.* 1. 1. 3. (3).

19) *De int.* I 3 (1) : „Nulla autem operationum passivarum proprie pertinet ad intellectum aliquem, qui sit intellectus in actu per suam essentiam, nisi vocemus pati hoc, quod recipiunt tales intellectus suas essentias a superioribus principiis, quas non recipiunt ut passiones, sed ut actiones.“

De int. II 37 (2) : „Tria enim invenimus in cognitione eius. Quorum primum et principale est suum principium, a quo procedit intelligendo, in quo consistit suae essentiae acceptio.“

20) *Liber de causis* prop. 8: „Et causa quidem prima non est intelligentia neque anima neque natura, immo est supra intelligentiam et animam et naturam, quoniam est creans omnes res. Verumtamen est creans intelligentiam absque medio et creans animam et naturam et reliquas res, mediante intelligentia.“ Cf. *ibid.* prop. 7.

- 21) *De int.* III 23 (2) : „Res enim naturales aliae ab intellectibus, inter quas causa attenditur et causatum, habent tales habitudines ad invicem naturaliter, id est per modum naturae, non intellectualiter, scilicet quod causa in causando intelligat causatum suum et ipsum causatum in eo, quod causatur et procedit a causa sua, intelligat causam suam, sed solum, sicut dictum est, naturaliter, id est per modum naturae, secundum quod natura distiguitur contra intellectum.“; cf. *ibid.* (3).
- 22) それ故, *De vis. beat.* 1. 2. 1. 1. 5 での「第一の根源である神への還元 (reductio) の様式 (modus)」という問題構制からは *imago* の在りかたは十全に規定できない。何故ならば、この還元という視点は既に外的な事象からの思惟を拠点として (「より内なる根源」へ方向づけられて) いるからである (cf. *De vis. beat.* 1. 5. (6))。
- 23) *Tractatus de origine rerum praedicamentalium*, 5 (61) : „Quia enim metaphysicus considerat ens inquantum ens, quae consideratio est entis per essentiam secundum rationem suae quiditatis circumscriptis a re suis causis, tam efficientibus quam finalibus, hinc est, quod solum definit proprie per causam formalem; “ (in: *Opera omnia* III. Schriften zur Naturphilosophie und Metaphysik, Hamburg 1983).
- 24) *De vis. beat.* 1. 2. 1. 1. 7 (3) : „Principium enim substantiae suae, a quo intellectualiter fluit, magis intimum est quam ipse intellectus sibi ipsi, et sic intelligendo suum principium non intelligit aliquid extra se, immo plus intra se quam in eo, quod intelligit suam essentiam.“
- 25) トマス (Thomas de Aquino, 1225-1274) との差異における、ディートリッヒの形而上学構想にとって重要なこの問題連関について、詳しくは以下を参照: Kurt Flasch. *Procedere ut imago. Das Hervorgehen des Intellekts aus seinem göttlichen Grund bei Meister Dietrich, Meister Eckhart und Berthold von Moosburg*, in: Kurt Ruh (Hrsg.), *Abendländische Mystik im Mittelalter*. Symposium Kloster Engelberg 1984. Stuttgart 1986, S. 125-134, 特に S. 126-28.
- 26) エックハルトとも共通する、アリストテレスから乖離する形而上学のコンセプトの問題構制について: 拙論「霧の只中の明けの明星のように…」——マイスター・エックハルトの言語理解における、〈一性形而上学への精神形而上学の統合〉という事態究明へ向けて—— (『中世思想研究』第 48 号, 知泉書館 平成 18 年 9 月, 69-82 頁) を参照。
- 27) *De vis. beat.* 1. 2. 1. 1. 7 (2) : „Et sic in sua substantia essentialiter est id, quod est sua sui ipsius intellectione intelligens se ipsum per essentiam suam, quod quidem originaliter et principaliter est ex eo, quod intelligit suum principium.“
- 28) *Ibid.* : „Et sic intellectualiter emanat ab eo ita, quod sua substantia non est nisi quidam conceptus, quo concipit et intelligit suum principium, sine quo nec suam propriam essentiam potest intelligere.“

- 29) *De int.* II 37 (2) : „Quorum primum et principale est suum principium, a quo procedit intelligendo, in quo consistit suae essentiae acceptio.“
- 30) *De vis. beat.* 1. 4 (2) : „... quia videlicet insignitus est ea, quae est essentialiter imago, necessarium est praedicta tria magis et principalius competere saepe dicto intellectui et per consequens, quod ipse sit per prius et formalius et principalius imago et capax Dei.“
- Cf. *Ibid.* (1) (3). この点から、神は知性の原理として、本性と概念に即して「他の如何なる諸対象よりも〈より先に〉」認識される、というテーゼが帰結する (*De vis. beat.* 1. 3. 3., (11)). むろん、ディートリッヒにとっての神認識は、自己活動的知性本質である能動知性自らの存在認識 (自己認識) と不可分離的に一致しているのであるが (*De vis. beat.* 1. 2. 1. 1. 7 (2)).
- 31) *De vis. beat.* 1. 5 (6) : „Non enim primo ab ipso procedit et postea alio respectu seu operatione in ipsum convertitur, sed eadem simplici intellectione, quae est essentia eius.“
- 32) *De int.* II 37 (3) : „Secundum est sua essentia, quam intelligit, sub ordine tamen eius modi intelligendi, quo intelligit suum principium, ita, quod non sunt duae intellectiones, sed una numero, ...“
- 33) *De int.* II 40 (3) : „... quod intellectus agens et omnis intellectus, qui est intellectus in actu per (56 va) essentiam, nihil intelligit extra se, quia non intelligit nisi essentiam suam et suum principium sive causam suam, quae est intima sibi, ...“
- 34) *De int.* II 36 (3) : „Ratio autem, a qua procedit intellectus per essentiam in actu eo modo, [...], non est ita determinati generis seu respectus, sed gerit in se similitudinem totius entis in quantum ens. Et ideo talis intellectus procedit a Deo in similitudinem totius entis in quantum ens et suo ambitu respicit universitatem entium sicut et suum principium, unde procedit.“ Cf. Quaestio utrum in Deo sit aliqua vis cognitiva inferior intellectui, cod. A, fol. 104.
- 35) *De int.* II 37 (4) : „Tertium est universitas entium, quam totam suo ambitu comprehendit quantum ad suam cognitionem, ...“
- 36) *De int.* II 38 (1) : „Quamvis autem tria praedicta attendamus in cognitione intellectus agentis, scilicet suum principium, a quo intelligendo procedit, et suam propriam essentiam et tertio universitatem rerum, hoc tamen non facit tres intellectiones, sed unam solam, sicut etiam suum principium, a quo procedit, uno solo actu cognitionis intelligit se et alia et, sicut colligitur ex pluribus propositionibus *Libri de causis*, quaelibet intelligentia intelligit, quod est supra se, hoc est causam suam, stat etiam fixa cognoscendo rediens super essentiam suam reditione completa, intelligit etiam, quod est sub ea, id est causatum suum, non tribus intel-

lectionibus, sed uno simplici actu intellectionis, ...“

- 37) *De vis. beat.* 1. 1. 4 (4) : „Quia igitur secundum iam dicta in intellectu, qui est intellectus per essentiam et semper in actu, omnia entia intellectualiter resplendent in sua essentia, ...“
- 38) *De vis. beat.* 1. 1. 5 (1) : „... intellectus, qui est intellectus per essentiam et semper in actu, qualis est intellectus agens, sicut se ipsum, sic omnia alia intelligit per suam essentiam et eodem modo, quo se intelligit, et eadem simplici intellectione. Cum enim ipse per suam essentiam sit exemplar totius entis in eo, quod ens, et secundum hoc sit intellectualiter totum ens, ...“
- 39) Cf. Meister Eckhart, *Sermo XLIX* 2 n. 510 - 511 (LWIV S. 425 Z 5 -8; S. 425 Z 14 f.)—更なる論及は、以下の研究書を参照: Mauritius Wilde OSB, *Das neue Bild vom Gottesbild. Bild und Theologie bei Meister Eckhart*, Freiburg/Schweiz 2000, S. 114-123.